tomoni つながる和綿プロジェクト

tomoni つながる和綿プロジェクト
2016-2021

文化庁
令和3年度 文化庁
文化芸術創造拠点形成事業

ぎふ清流文化プラザ
ともに、つくる、つたえる、かなえる

主催：(公財)岐阜県教育文化財団
共催：岐阜県

tomoni つながる
和綿プロジェクト

tomoni
GIFU PROJECT

和綿

tomoni つながる和綿プロジェクト
2016–2021

和綿で紡ぐ人と人、人とモノ、モノとコトがつながる物語、そして未来へ

2016年、アート、デザイン、ビジネス、福祉、農業の分野をつなぎ、新たな出会いと仕事が生まれる場をめざす「tomoniつながる和綿プロジェクト」が、ここ岐阜の地からはじまりました。

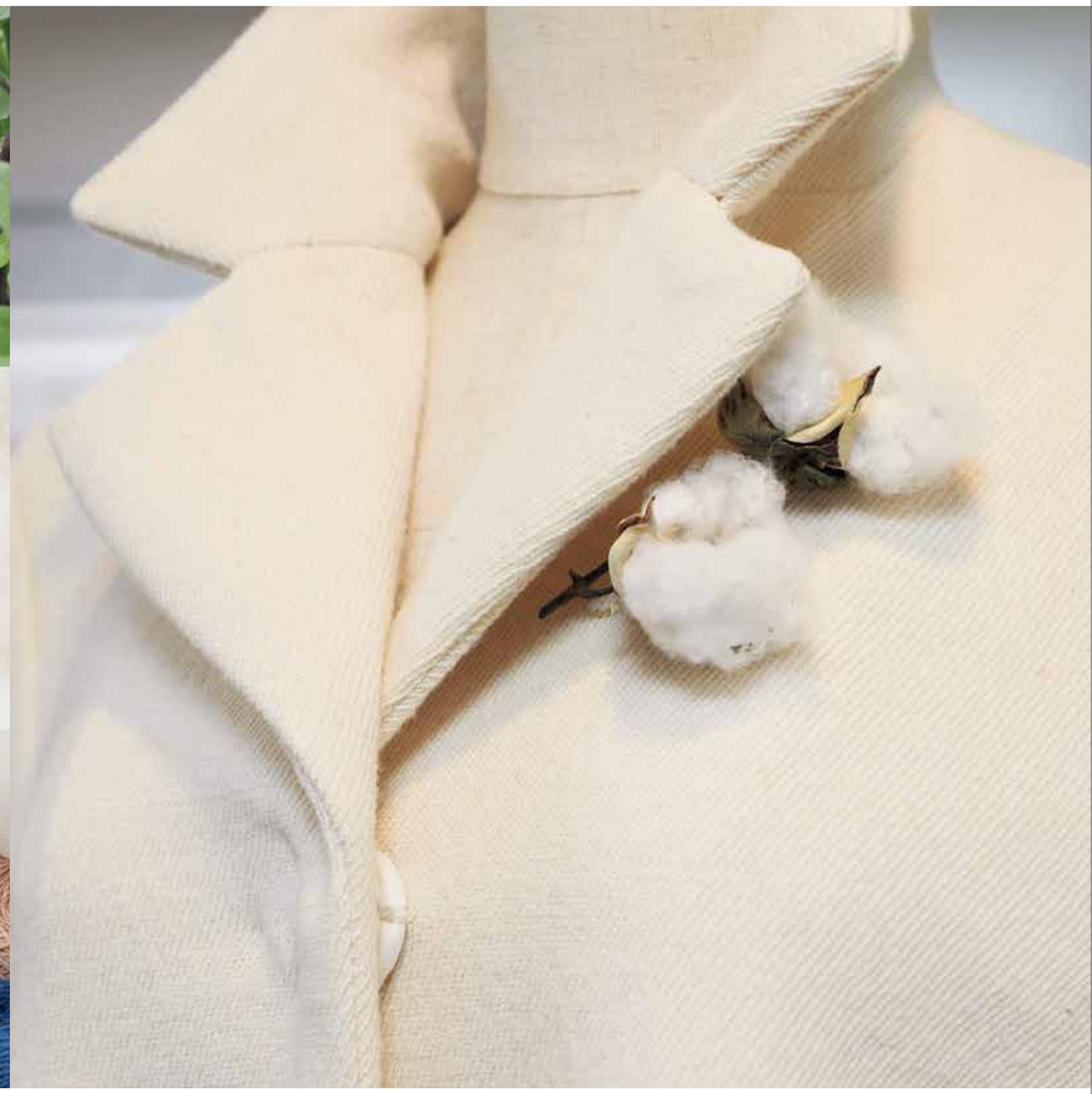
長く、岐阜市内で縫製業を営む（株）マインド松井さんの手で大切に受け継がれてきた和綿の種。
その種は、和綿のルーツのひとつとも言われる三河木綿の種でした。
その種をわけていただき、岐阜県、文化庁などの行政支援をいただきながら、丁寧に育てはじめました。

有機農業で畑を耕し、種を蒔き、育て、収穫した和綿を、大切に紡ぎ、糸にし、布にし、自然の植物で染めあげ…と、障がいのあるなしに関わらず、多くの人々とともに、それぞれが自然体で出来る事からとの想いで、自在にまじわりながら、心と身体に寄り添う、さまざまなものづくりへの挑戦を行ってきました。

そして7年目を迎えた、2022年、tomoniつながる和綿プロジェクトは新しいステージに向かいます。
この6年間、紡いできたものは、綿花だけではありません。

人と人との出会い、自然のサイクルを知る時間軸、大地の大切さ、すべての生き物の循環のカタチ、この世界に無駄なものは何一つないこと、そして日本人が、過去から大切にしてきた自然と寄り添った手仕事への想い、道具の発明から機械へと向かう過程に込められた願いや、人々にとっての「本当の幸せ」のありかについて。
現代を生きる私たちだからこそ、今、向き合うべき持続可能な未来とは何なのでしょうか?

この6年間の記録誌を通じて、和綿が紡ぐ「GIFT/未来への贈りもの」が、その問いへの答えのひとつとなることを願いつつ、私たちもまた次の時代への「懐かしくも新しい未来への一歩」に向かい、その歩みをつないでいきたいと願っています。



古田菜穂子
tomoniつながる和綿プロジェクト 統括ディレクター
（公財）岐阜県教育文化財団　文化芸術アドバイザー

土屋明之
tomoniつながる和綿プロジェクト　運営プロデューサー
（公財）岐阜県教育文化財団　岐阜県障がい者芸術文化支援センター 業務総括

tomoni GIFU PROJECT　tomoni つながる 和綿プロジェクト

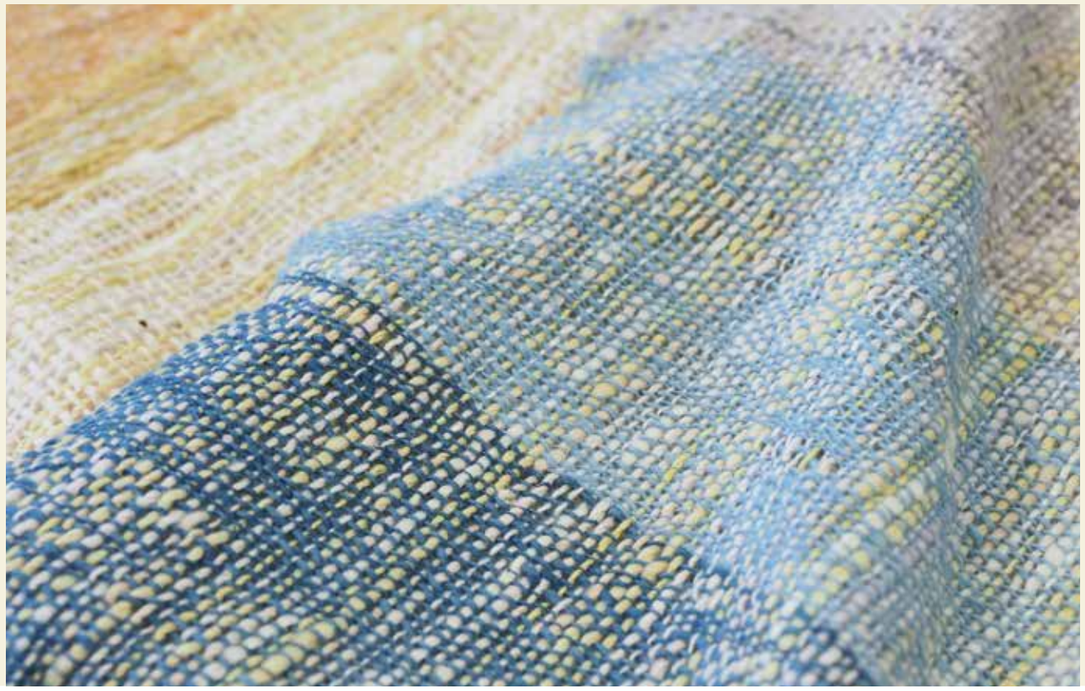
tomoni GIFU PROJECTについて

（公財）岐阜県教育文化財団は、障がいのあるなしに関わらず、「ともに、つくる、つたえる、かなえる」を合い言葉に、県民参加による新たな文化芸術の発信と、年齢、性別、障がいのあるなしに関わらず、誰もが芸術を通して表現する自由と楽しみを共有できる共生社会のあり方を発信し続けています。

障がいがありながら、創作活動を続ける作家を発掘し、その既成概念にとらわれない独創性を発揮している作品、日常の一コマでひっそりと作り続けられていた作品、コミュニケーションの手段としての作品など、様々な物や人、そしてアートに触れることで、人々の多様さに気付き、そこから生まれる新たな会話や交流を通して、より深く認め合うことのできる社会につながることを目指しています。

tomoni つながる和綿プロジェクトについて

江戸時代から明治時代初期にかけて和綿の栽培は、各地で盛んに行なわれていました。当時は、大人も子どもも、自分が身にまとっている綿製品が、どんな場所でどんなに手間ひまをかけて作られていたかを目に浮かべることができたことでしょう。
ところが、いつしか私たちは、ひとつのモノが作られるまでの過程に無頓着になり、それとともに、モノに対する愛情や敬意も薄れてしまったように思えます。
私たちは、日本の風土と日本人の肌に一番なじむ繊維である「和綿」を育て、糸にし、布にしていく過程の中でアート、デザイン、ビジネス、福祉、農業の分野をつなぎ、新たな出会いと仕事が生まれる場づくりを目指します。



1

●デザイン　松波聖子（コットンコネクション）／ Hanji
●出品作家　大洞千恵子／小椋貴明／金子一文／河合朱音／柴田凌佑／関谷正和／長寛磨
中島呼里／中橋裕子／西垣宏司／西脇秀威／久田誠／ひとつばたご／森岡聖人
●協力　（一財）岐阜県身体障害者福祉協会／ THE GIFT SHOP ／野田真一／加納一郎
（株）マインド松井／小田陶器（株）／家田紙工（株）
●グラフィックデザイン　小寺克彦
●プロデュース＆アートディレクション　古田菜穂子／土屋明之　●総合プロデュース　小島紀夫

2

関連イベント

第 2 回 tomoni プロジェクト展スペシャルイベント　9/18

- テーマ「アート・デザイン・ビジネス・福祉・農業をつなぐものづくり」
- 出演者　松井要（マインド松井）／伏見有起（Hanji）／都竹政貴（メルチデザイン）／小寺克彦（K デザイン）
- ファッションショー＆パフォーマンス 出演：ふれ愛の家 9 名
- tomoni マルシェ 01
- 糸つむぎワークショップ

- デザイン　井上美穂／伏見有起／メルチデザイン
- 制作　池田町社会福祉協議会「ふれ愛の家」／(社福) いぶき福祉会第二いぶき／エンジェルハウス／かがやきネットワーク／(社福) 岐阜県福祉事業団 清流園／コットンコネクション／(株) マインド松井／メルチデザイン／荒井博子／伏見有起／山崎洋子／二村元子／高野紗也加／高橋玲子／ワークショップ参加者
- 原画　浅野雅子／伊藤春樹／大場俊／西脇秀威／森岡聖人／横井裕
- 協力　（一財）岐阜県身体障害者福祉協会／岐阜県美術館／清流園／はなの木苑／大西暢夫／神保哲太／吉川章／tomoni つながる和綿プロジェクト推進チーム
- グラフィックデザイン　小寺克彦
- プロデュース＆アートディレクション　古田菜穂子／土屋明之
- 総合プロデュース　小島紀夫

3

関連イベント

- 織り体験コースター作りワークショップ　8/15・8/18・8/20
- tomoni プロジェクト世界のまなざしDivesityGathering　11/3

- プロダクトデザイン・制作　宇津木哲子
- 制作　池田町社会福祉協議会「ふれ愛の家」／井上美穂／メルチデザイン／伏見有起／コットンコネクション／（社福）いぶき福祉会第二いぶき／西美濃の里「工房 TAKE」／美濃縞伝承会／ワークショップ参加者
- 協力　(株)マインド松井／大西暢夫／吉川章／ tomoni つながる和綿プロジェクト推進チーム
- グラフィックデザイン　小寺克彦
- プロデュース＆アートディレクション　古田菜穂子／土屋明之
- 総合プロデュース　小島紀夫

関連イベント

tomoni プロジェクト 世界のまなざし

Diversity Gathering

～ともに、つくる、つたえる、かなえる～

2017 11/3（金・祝） 会場／ぎふ清流文化プラザ　長良川ホール

伝統の手仕事でインドの貧困解決

NIMAI－NITAI代表
廣中 桃子 氏

大学時代、マザー・テレサの活動に興味を持ち、インドを旅して貧困を実感。生涯を通じて貧困解決に関わりたいと、2012年に起業し、雇用創出による村民の自立を目指してきた。現在は、最貧困州の一つ、ビハール州ブッダガヤに作業所を構え、女性に裁縫を指導し、インドの伝統的な素材・技法・手仕事を生かしながら、アパレルの世界で通用する布製品を生産・販売している。しかしその中で、ビジネスだけでローカルを発展させることは難しいことも実感した。インドでは、手紬ぎ・手織りといった仕事はお金に換算するものではなく、国内で自然と回っていく流れがある。今後は、そういった流れを支援する関わり方も模索していきたい。

地域が自立してつながる社会に

NIMAI－NITA
インドアシスタントダイレクター
カルビーン・シン 氏

現在、妻が運営するアパレルメーカーのマネージャーとして、納期の管理や品質の保証を担っている。私自身、自分が村人の支援に回ることは考えもしなかったが、妻に出会い、彼女がインドの地域社会で一人一人が自立できる環境を整え、貧困を解決したいという夢をサポートしたいと感じた。インドにある70万の村落がそれぞれに自立し、横につながっていくことは、マハトマガンディーが唱えた夢でもあった。しかし現在、それをフォローしている人は、インドでも数少ない。妻をサポートする中で、その夢をカムバックさせ、自分たちの文化を主体的につくるためには、自分の手でものをつくることが非常に重要な手段だと感じている。

ローカルから世界を変える活動を

tomoni－つながる和綿プロジェクト統括ディレクター
古田 菜穂子 氏

tomoniプロジェクトの一環として、昨年から始まった和綿プロジェクトでは、岐阜大学近辺の休耕田など各地で、日本古来の種から有機農法による和綿栽培を多くの人々の協力のもと行ってきた。昨年収穫した和綿は、羽島の美濃縞伝承会によって手紬ぎの糸にした後、障がい者施設・第二いぶきで草木染を施し、神戸町の工房TAKEにて、さをり織りの生地とし、障がいのある人、無い人にかかわらずそれぞれが出来る事を行う中で全てメイド・イン・岐阜の一枚の布と糸が出来上がった。活動を進める中で、元々地方にはそれぞれの特色を活かした素材や伝統技術が存在することを実感。

さらに、ローカルの特性により世界を変える、国内外のさまざまな活動にも出会うことができた。今回の世界会議でご紹介いただいたアイディアを参考に、今後もプロジェクトをみなさんと（tomoni）展開させていく。

「tomoni つながる和綿プロジェクトの可能性
～Local（場所、地方、地方特性）から世界を変える?」

【第１部】
出演
- 文化人類学者、環境運動家、明治学院大学国際学部教員
  辻信一
- フェアトレード NIMAI 代表
  廣中桃子
- NIMAI インドアシスタントダイレクター
  カルビーン・シン
- フリーライター、ジャーナリスト、日本 GNH 学会理事
  田中一彦
- （公財）岐阜県教育文化財団文化芸術アドバイザー、tomoni つながる和綿プロジェクト統括ディレクター
  古田菜穂子

「アール・ブリュットにみる世界のまなざし」

【第２部】
出演
- 写真家、映画監督、絵本作家　大西暢夫
- （公財）岐阜県教育文化財団障がい者文化芸術アドバイザー、中部学院大学短期大学部特任教授
  土屋明之

【ビデオメッセージ】
- 映像制作『クリエイティブ・カウボーイ・フィルムズ』主宰
  アンドレア・ハイランド、ピーター・ハイランド

【特別ゲスト】
- オカリナ奏者　宗次郎
- ピアニスト&作曲家　Arico 山下有子

写真／大西暢夫

第1部

Diversity Gathering
～ともに、つくる、つたえる、かなえる～

和綿プロジェクトの可能性 ～ローカルから世界を変える～

11月3日、tomoniプロジェクトの一環として、「和綿」や「手仕事」「スモール・エコノミー」「ローカル」などをキーワードに、アートと福祉、デザイン、経済をつなぐ取り組みを発信するパネリストとともに、これからのtomoniプロジェクトを考える国際会議が開催された。当日は、国内外の様々な地域で展開されている先進事例が発表され、多様な人々がともに暮らせる共生社会の実現に向けて、意見が交わされた。

ローカルに見る多様性という豊かさ

文化人類学者・環境運動家
辻 信一 氏

近年、グローバル化によって個性への不寛容さが広がり、環境や文化、社会、そして個人の多様性が急速に失われつつある。その中で注目しているのが、GDPなどの経済的指標ではなく、GNH（国民総幸福量）を目標に掲げるブータンだ。文化存続の基盤である衣食住の中でも、「衣」はグローバル化で多様性が最初に失われたもの。ブータンは古くから織物が盛んだが、現在綿糸はインドなどからの輸入に頼っている。しかし私が10年ほど通う村では、年輩者が若い世代にその技を伝えながら、伝統の綿製品づくりを復活し始めた。

今こそこうした個性あるローカルに目を向け、その豊かさを取り戻していかなければいけないと考えている。

地域に息づく文化を知ることが大切

フリーライター・ジャーナリスト
田中 一彦 氏

戦前にアメリカの人類学者・エンブリー夫妻が「協同（助け合い）」をテーマに調査した熊本県球磨郡須恵村（現あさぎり町）に興味を持ち、2011年から3年間、同町に移住して須恵の人々の暮らしを探った。戦前の同村に根付いていた「かちゃあ」と呼ぶ共同労働や、助け合いを意味する須恵独自の方言「はじあい」の文化を生かそうと、2013年から「和綿の里づくり」活動がスタート。子供や障がい者を含め多くの住民が運動を育てている。小学校でお年寄りが語り部として文化を伝承する会も5年目、村に息づく豊かさを知る取り組みへと定着した。こうした活動から、多様な地域文化を村民自身が再認識することの大切さを実感している。

学びから行動、そして実現へ アート、福祉、デザイン、経済をつなぐと見えてくる多様な世界

第2部

アール・ブリュットにみる世界のまなざし

公益財団法人岐阜県教育文化財団障がい者文化芸術アドバイザー
土屋 明之氏

写真家 大西 暢夫氏

伝統や流行、教育などに左右されず、内側から湧きあがる衝動のままに表現されるアール・ブリュット。近年、それは二元的な障がい者アートに留まらず、芸術表現の新境地として注目されている。今回は、精神病院に長期入院する人々を撮影し、彼らが生み出す作品を見つめてきた大西暢夫氏と、美術教員として障がいを持つ子どもたちとものづくりを行ってきた土屋明之氏が、その魅力を紹介。大西氏は、現在フランス・ナント市で開催されている日本のアール・ブリュット「KOMOREBI」展の様子を報告し、現地で感じた関心の高さを伝えた。

【特別ゲスト】

宗次郎

宗次郎　オカリナ奏者

Arico 山下有子

Arico 山下有子　ピアニスト＆作曲家

〈岐阜新聞 2017 年（H29）12 月 4 日から抜粋〉

4

オープニングイベント 11/18

●テーマ「見つけよう伝えよう　和綿の可能性」

●出演者

平野宏司　（学校法人平野学園　理事長）

宇津木哲子　（work u design）

山川直人　（東京工芸大学芸術学部映像学科 教授）

岐阜盲学校／曽我部弘樹／髙橋由衣／

井上美穂　（(株) マインド松井）

企画・開催主旨

2016年より開始した和綿プロジェクト。3年目の2018年（平成30年）からは、過去3回までのtomoni project活動の一環としての展示から、あらたに「tomoniつながる和綿プロジェクト」という独立した事業プロジェクトとしての企画展となり、今まで育て、収穫した有機和綿の持つさまざまな可能性を「Diversity～多様性」の観点から見つめ、伝えることを主眼におきました。

3年を経て、ここ岐阜の地で安定した和綿の収穫がやっと見込めるようになった中、和綿プロジェクトの目的の1つである2020年のオリンピック、なかでもパラリンピックに提供出来る「和綿のモノづくり」への具体提案を行いたいと、視覚障害や難病などさまざまなタイプの障がいを持つ方々の意見や声に耳を傾け、その中から有機和綿や和綿生地の持つ個性を活かした具体的な活用手法をアート視点を加えて企画しました。

今回は特に若い世代の自由な発想にも期待し、人と人、人とモノとの関係性を見直すべく、学校法人平野学園のみなさんの参加など、新たな展開も生まれました。

企画を進める中で、暮らしの不自由さを感じている方々の意見は、健常者と言われている人々にとっても充分役立つものであることや、目の不自由な方が和綿と触れ合ったときに発せられる言葉や、笑顔、アイデアなどからは、人がつい忘れがちな人々に寄り添う「心地よい感触」の大切さも実感し、それらを映画監督に依頼した映像でも表現させていただきました。

この展示を通じ、便利になった現在の日常生活の中では忘れがちな「人間もまた自然の一部であり、自然の力に活かされている小さな存在であること」にも想いを馳せていただく一助になればと願っています。

●プロダクトデザイン・製作／宇津木哲子

学校法人平野学園（川畑怜奈／栗山小百合／多和田玲亜／服部朱里／安田瑞姫／伊藤美奈小寺起那／下村和香奈／安藤舞／石原明奈／大島詩穂／浅井優衣／有里萌美／伊藤佑衣／玉田亜海 ／長岡優奈／伊藤樹里／清水萌愛／服部華恋／岩井日向子／大橋望愛／久保田百合子／早崎薫／江崎梨花 ／馬場康子／平野宏司）

関連イベント ●糸紡ぎ体験ワークショップ　12/16

●記録映像製作　山川直人 東京工芸大学

●協力　岐阜県立岐阜盲学校（小学部児童、高等部普通科生徒、教諭）／

曽我部弘樹／髙橋由衣／(株) マインド松井 井上美穂／

(社福) いぶき福祉会／

tomoni つながる和綿プロジェクトトチーム 他

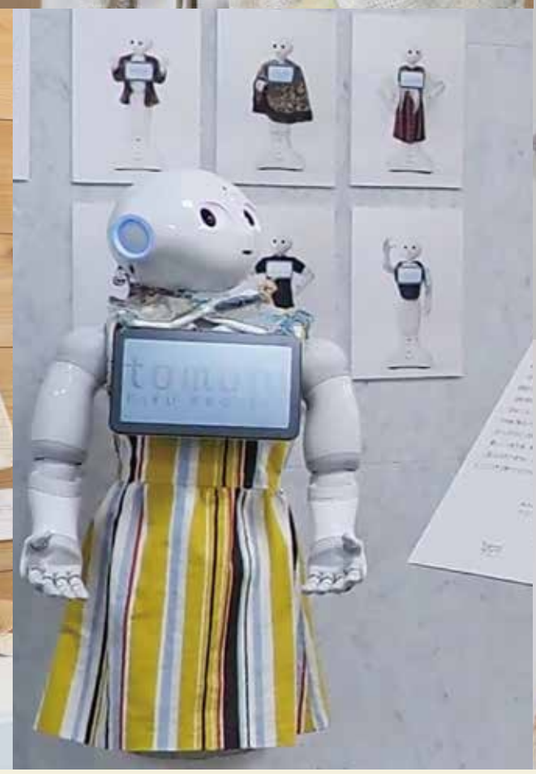
●グラフィックデザイン　小寺克彦

●プロデューサー＆アートディレクション　古田菜穂子／土屋明之

●総合プロデュース　小島紀夫

4

和綿って
すごく柔らかいけど、ひっぱってみると強い
同じ綿でも強靭な感じ
弾力がある
ふわふわした感じが好き
糸になったものは固くなった気がするけど
細かく触ってみるとやわらか
最初の種がついている状態から
これができるなんて想像できない
気持ちいい！
小物にも合いそう
触り心地が綺麗！
綿菓子みたい
チクチクしないから、
直接着れるセーターにしたら？
種が入っていたような気配が残っています
触り心地が良いからほっとしました
タオルよりずっとあったかい
なりたちを知るって貴重なこと
～見つけよう 伝えよう～
和綿の可能性
和綿


tomoni

オープニングイベント 11/17

- ●テーマ「創り出そう、未来への実り」
- ●出演者
  - 宇津木哲子（work u design｜テキスタイルデザイン作家・デザイナー）
  - 井上美穂（(株) マインド松井）
  - 荒井博子（エンジェルハウス）
  - 平野宏司（(学) 平野学園 理事長）
  - 古田明広（(株) エスト 代表取締役）
  - 戸田柳平（(有) 渋草柳造窯 代表取締役）
  - 大野美里（TeamApop 代表）

関連イベント

- ●糸紡ぎ・ミサンガづくり体験ワークショップ　12/1

企画・開催主旨

tomoniつながる和綿プロジェクトをスタートさせて4年が過ぎた2019年（平成31年/令和元年）は、これまで実施してきたさまざまな取り組みを活かし、来年度開催される（予定であった）、パラリンピックに提供する「和綿のモノづくり」の具体提案を、実際に障がいを持ちながらもスポーツに取り組んでいるパラリンピックの代表選手などへのインタビューをおこなう中で、「未来への実り（ミノリ）」として形にしたいと考えました。

私たちはプロジェクトを通じ、障がいも個性のひとつであり、障がいのあるなしに関わらず「tomoni／ともにつくる、伝える、かなえる」を実現する「本物のものづくり」を目指しています。
同時に、和綿という日本古来からの種を守り、それを有機農法で育て、糸にし、布にし、製品にする中で、自然の力をお借りしながら「手仕事」から「道具」が生まれ、やがて「機械化」していった人間の知恵と努力の見直しや、効率を求めるが故に「失ったもの」などについても再度、見つめ直してみたいと考えています。

この岐阜の地で「tomoniつながる和綿プロジェクト」で多くのみなさんの協力のもとで紡がれた和綿は、すべての命の源である「土壌／terroir」の大切さを伝えてくれると同時に、未来の社会に向けての「SDGs／持続可能な発展の実現」に向けたオーガニック・ムーブメントの現れのひとつでもあります。

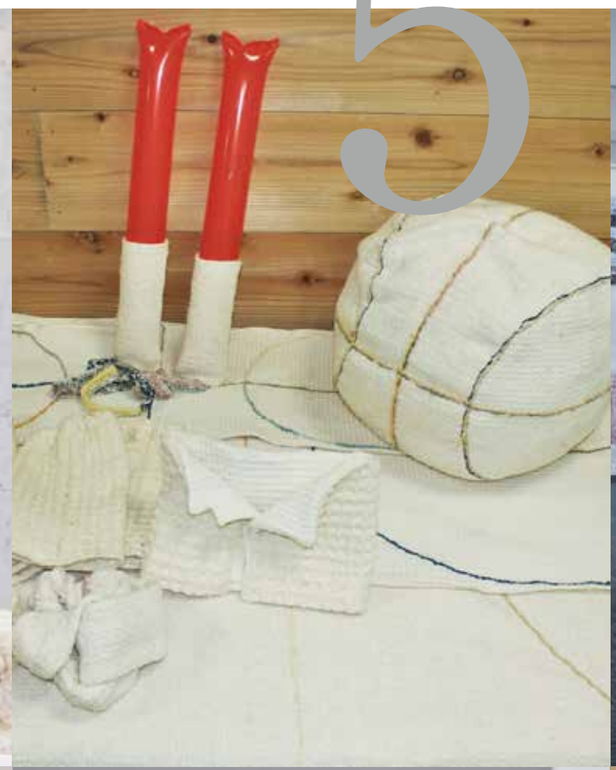
そのため、社会に役立つ和綿製品の役割などについても考え、コロナ禍で需要が高まったマスクや、がん治療による副作用で悩む方々へのおしゃれな帽子製作を行うグループとのコラボレーションなどにも挑戦しました。

今後、ますますダイバーシティ化していく世界の中で、和綿の未来が、障がいのあるなしや、人種の違いなどを超えて、すべての命が、かけがえのないものであり、過去も未来も今につながる「未来への実り(ミノリ)」となることを願っています。

- ●プロダクトデザイン・製作　学校法人平野学園（伊藤美奈／小寺起那／下村和香奈／安藤舞／石原明奈／浅井優衣／有里萌美／伊藤佑衣／玉田亜海／長岡優奈／伊藤樹里／清水萌愛／服部華恋／岩井日向子／大橋望愛／川合希美／刈谷萌／金武万結／桐山響生／久保田百合子／馬場康子／川畑伶奈／平野宏司）
  宇津木哲子／市村美佳子 ／大野美里
- ●デザイン　守屋里美／愛葉紗弓
- ●製作　井上美穂／戸田鉄人 ／加藤愛／飯塚美穂／荒井博子／小川祐香／片山藍／浅井辰哉／今尾芹菜／川島孝子
- ●協力　池戸義隆 ／秋田啓／ FINALITÉ ／ tomoni つながる和綿プロジェクトトチーム 他
- ●グラフィックデザイン　小寺克彦
- ●プロデューサー＆アートディレクション　古田菜穂子／土屋明之　●総合プロデュース　小島紀夫

5

第5回 tomoni つながる和綿プロジェクト展
～創り出そう、
未来への実り～
2019年11月17日(日)~12月8日(日)
9:00-17:00 入場無料
tomoni
GIFU PROJECT



tomoni

関連イベント

●和綿でスワッグづくりワークショップ
〈中止〉

オープニングイベント 12/5

●テーマ「未来への実り、つながるカタチ」
●出演者
田辺謙太朗（(株) ナイガイテキスタイル代表取締役）
小野美奈子（カタカミナ｜デザイナー）
古田明広（(株) エスト 代表取締役）
井上美穂（(株) マインド松井）
平野宏司（(学) 平野学園 理事長）
中村武文（池田町社会福祉協議会「ふれ愛の家」副所長）
＊欠席者コメント［映像］
宇津木哲子（work u design｜テキスタイルデザイン作家・デザイナー）
成澤裕子（ライフスタイルコーディネーター）
市村美佳子（緑の居場所デザイン主宰｜フラワーデザイナー）

企画・開催主旨

tomoniつながる和綿プロジェクトをスタートさせて5年目の2020年（令和2年）には、これまで育ててきた岐阜県産有機和綿を、県内企業の協力を得て、紡績糸にし、布にし、それを岐阜県と東京在住のデザイナーにより、和綿の特性を活かしたお洒落な衣類にするという、はじめてのチャレンジを行いました。

オリンピック・パラリンピックへの提供を目指してきた和綿のものづくりは、新型コロナウイルス感染症の影響で一年、延期となりましたが、その期間をより熟考させる時間であると捉え直し、和綿が紡ぐ、さまざまな「未来への実り（ミノリ）」を、より多くの人々の力や、想い、脈々と受け継がれてきた技術とのコラボレーションなどによってさらなる進化を目指すなかでの多数の方々による和綿のミサンガづくりにも挑戦し、500近い手作りのミサンガを完成させることができました。

また岐阜県が交流をしているリトアニアとは、和綿とリネン（亜麻）の交流もはじまりました。こちらも新型コロナウイルス感染症の影響で、現地にお邪魔しての交流は叶いませんでしたが、コロナ禍で日常となったオンラインによるミーティングにより、画面越しではありますが、face to face での現地の活動家の方との交流がはじまりました。

極端に減少した海外輸送の中で、リトアニアからのリネンを、ドイツ在住の輸送業者である知人の手助けにより、時間はかかりましたが、無事、受け取る事もできました。どのような社会になっても、最後は、心ある人と人との「つながりの大切さ」なのだということを実感した一年でした。

和綿の実りが、今後、障がいのあるなしや、人種の違いなどを超えて、すべての命がかけがえのないものであり、地道に育んできたこれらの「未来への実り」が、新たなカタチとなることへの願いを感じ取っていただけるような企画展を目指しました。

●プロダクトデザイン・制作
(株)エスト
(学)平野学園ヴィジョンネクスト情報デザイン専門学校（清凌高等学校）
（小寺起那／安藤舞／石原明奈／伊藤佑衣／玉田亜美／伊藤樹里／清水萌愛
服部華恋／岩井日向子／大橋望愛／川合希美／刈谷萌／金武万結／桐山響生
井澤那央美／梅津杏香／西脇玲奈／山岸愛唯／山下七海／若原理紗
久保田百合子／馬場康子／川畑伶奈／平野宏司）
宇津木哲子／成澤裕子／小野美奈子／市村美佳子
●デザイン　守屋里美
●制作　井上美穂／戸田鉄人

●協力
新内外綿 (株) ／ (株) マインド松井 井上美穂／丹羽治産業 (株) ／
池田町社会福祉協議会「ふれ愛の家」／ (社福) いぶき福祉会第二いぶき／
おといろアイランド／ (有) 渋草柳造窯／加子母森林組合／
ロムアルダス・カミンスカス (在リトアニア) ／
ジヴィレ・ヨマンタイテ (岐阜県国際交流員) ／和綿の里づくり会（熊本県）／
(株) 水俣浮浪雲工房（熊本県）／（一財) 境港市農業公社（鳥取県）／
NPO 法人渡良瀬エコビレッジ（栃木県）／ぎふ木遊館／
ミサンガづくり協力者／ tomoni つながる和綿プロジェクトチーム　他
●グラフィックデザイン　小寺克彦
●プロデューサー & アートディレクション　古田菜穂子／土屋明之
●総合プロデュース　小島紀夫

6

関連イベント

- ●和綿で織り体験ワークショップ〈中止〉
- ●和綿シンポジウム 2/5→3/20 延期

オープニングイベント 1/15

- ●テーマ「未来への GIFT(ギフト)・for a sustainable future」
- ●出演者
  - 大橋竜二（大橋ニット（株）　代表取締役）
  - 墨勇志（（株）艶金 代表取締役社長）
  - 都竹政貴（メルチデザイン）
  - 山口泰代（（社福）いぶき福祉会第二いぶき）
  - 平野宏司（（学）平野学園　理事長）
  - 山川淳生
  - ドルスカイテ ギェドレ（岐阜県国際交流員）
- ●パフォーマンス
  - うのまきこ（木歌（mocca））（ボイスアーティスト）

企画・開催主旨

tomoniつながる和綿プロジェクトを開始して6年目を迎えた2021年（令和3年）には、今までの総括的意味合いも含め、過去の成果や課題を見直し、未来につながるGIFT（贈り物）となり、私たちだからこそできる持続可能なカタチにして、それらを発信したいと考えました。また、展示とともに全国各地で長く和綿栽培に取り組んでいる方々などをお迎えしたシンポジウムを企画・開催しました。

昨年、はじめて紡績糸となり布となった岐阜県産有機和綿は、新たな取り組みのひとつとして、新型コロナウイルス感染症の影響で一年延期となったオリンピック・パラリンピックへの応援グッズとして、200人以上の人とともに作成した和綿のミサンガを岐阜県ゆかりの代表選手たちに手渡すこともできました。

和綿が紡ぐさまざまな「未来への実り（ミノリ）」は、土を耕し、畝を作り、種を蒔くところから始まり、多くの人々の力や、想い、脈々と受け継がれてきた伝統の技術などとのコラボレーションにより、さらなる進化をとげつつあります。関わる人の輪も広がり、岐阜県が交流をしているリトアニアリネンとのコラボレーション衣服も完成しました。そのデザインには、“衣服のあり方”に真摯に取り組むデザイナーにより、貴重な布地を極力捨てないエシカルファッションとしての考えなども反映されています。

まさに和綿という日本古来からの種を守り、それを有機農法で育て、糸にし、布にし、製品にする中で、自然の力をお借りしながら「手仕事」から「道具」が生まれ、やがて「機械化」していった人間の知恵と努力の見直しや、効率を求めるが故に「失ったもの」を取り戻すためのさまざまな取組でもあるのです。また新たに「染色」という作業の中でのあらたな出会いとして「のこり染」の活用や、「染め直し」という習慣の見直しもはじめています。

2年あまりのコロナ禍のなかで、人の暮らしや考え方、世界とのかかわり方に大きな変化の兆しが見えています。今回の展覧会を経て、今まで地道に育んできた和綿の実りが、障がいのあるなしや、人種の違いなどを超えて、あらたな未来への持続可能なGIFTとなることを願いつつ、その想いの中で、これからの私たちが「本当に大切にすべきものは何なのか?」「何を私たちは未来に残していけるのか」について感じ取っていただきたい。

そしてまた次の時代への新しい一歩を踏み出せればと考えています。

- ●プロダクトデザイン・制作
  - 都竹政貴
  - 中谷さとみ
  - (学)平野学園ヴィジョンネクスト
  - 情報デザイン専門学校（清凌高等学校）
  - （伊藤佑衣／ド・ヴァン・ハオ／桐山響／刈谷萌／長屋有香／宮田美月／馬場康子／平野宏司）
- ●協力
  - 新内外綿（株）
  - 大橋ニット（株）｜大橋竜二
  - (株)艶金
  - エンジェルハウス｜荒井博子
  - (社福)いぶき福祉会第二いぶき
  - ぎふ木遊館
  - 田口康代
  - 美濃縞伝承会
  - (株)マインド松井｜井上美穂
  - (有)渋草柳造窯
  - 加子母森林組合
  - 和綿の里つくり会（熊本県）
  - (株)水俣浮浪雲工房（熊本県）
  - (一財)境港市農業公社（鳥取県）
- ●協力
  - NPO 法人 渡良瀬エコビレッジ（栃木県）
  - ロムアルダス・カミンスカス（在リトアニア）
  - ドルスカイテ・ギェドレ（岐阜県国際交流員）
  - ジヴィレ・ヨマンタイテ（元岐阜県国際交流員）
  - 岐阜県商工労働部観光国際局国際交流課
  - サンメッセ総合研究所｜田中信康
  - 小牧市立小牧南小学校｜青山英孝
  - ミサンガづくり協力者
  - tomoni つながる和綿プロジェクト推進チーム　等
- ●グラフィックデザイン　小寺克彦
- ●プロデューサー＆アートディレクション　古田菜穂子／土屋明之
- ●総合プロデューサー　小島紀夫

ドレスワンピース　渡良瀬エコビレッジ × 和綿プロジェクト（写真左）

最後に取り組んだ作品
和綿ニットを触ってきて、だんだんと分かってきました。
また女性服に取り組んできて、当然のことですが、年齢、体型、好みは人それぞれなので、それぞれの服には、それぞれの女性イメージがあります。
女性の体は丸みがあって、首元（襟ぐり）ラインはとても重要です。
優しく美しく布で体をつつみたい、そんな思いで作っています。

（都竹）

上着　和綿ニット 7 番手 × リトアニアリネン（写真中央）

スカートに合う上着をフランスの古い農民服にみられるデティールを真似しながらも、大胆に丈を短くしました。
理由は二つあります。一つは生地の分量が少なかったので目一杯使いたかったこと。もう一つは、裾を絞るか、開くのか、試しながら彫刻するように作るなかで、和綿ニットのドレープのでかたが美しく、少年時代に憧れたセーラー服のような、星のお姫様のような、時代も場所も流行もない服を自由に作りたかったからです。

（都竹）

筒スカート　リトアニアリネンニット（写真中央）

もともと、布帛 (織物) の服を制作してきた僕にとって、ニットはどこまでも自由に動く生地。それを縫製することは簡単ではありません。でも自分にとってはただの生地ではない。人の手と善意でできた応援したい気持ちが伝わってくる素材です。まずは筒編みのニットを自宅洗濯機で洗いをかけランドリー乾燥し、アイロン整型しました。収縮したニットの筒編みをそのままに上下を裁断してスカートに仕立てました。難易度高い生地でしたが、たっぷり時間をかけて作りました。

（都竹）

ワンピースドレス　リトアニアリネンニット（写真右）

リトアニアリネンの気品と体に優しく沿う感じをいかしたくてワンピースドレスを作りました。友人のおばあちゃんが昔着ていた服をアレンジしました。
クラッシックに着てみたくなる、しかも上質な部屋着としても良さそうな服に仕上がりました。
ベルト “あり” と “なし” で 2 とおり楽しめるデザインです。

（都竹）

●デザイン制作

都竹政貴　つづくまさき（岐阜市在住）

メルチデザイン ｜ デザイナー・服飾作家

1971 年 岐阜県生まれ
岐阜県立岐南工業高校デザイン科卒
デザインから縫製までを全て一人で行う
地元縫製工場にて技術を身につけた後、
独自のパターンメイキングで制作
1996 年個展「大量生産できない服」
MELCHI DESIGNS を始める。
今年は服の原料（種から）づくりを計画中。

柿渋バイヤスボーダーワンピース
渡良瀬エコビレッジ × 和綿プロジェクト

数年前、池田町の障害福祉サービス事業所ふれ愛の家の仲間たちと衣装作りに取り組んだ時の技法で染めました。
布にマスキングして柿渋をハケで型染しました。線の幅や角度は測らないで、有機的に染めの濃淡も誰でもできるような、単純で楽しい斜めストライプ（バイヤスボーダー）にしました。
角野栄子さん（魔女の宅急便の原作者）に着てもらいたい気持ちでワンピースをデザインしました。

（都竹）

バク枕カバー
渡良瀬エコビレッジ × 和綿プロジェクト

以前の tomoni プロジェクト展で伊藤淳司さんとのコラボレーションで作ったバク枕の進化系。
淳司さんのバクのイラストレーションを共に力を合わせて作った和綿ニットにプリントしました。
とっても肌触りの良い素材なので、寝具にピッタリ。
不安の多い現代社会に生きる僕らにとって、いい夢みれそう安眠バク枕は、多方向からの思いが一つに重なる素敵なプロダクトになったと思いました。
友人の助言に感謝!

（都竹）

MELCHI DESIGNS の定番型
（1950 年代のワークシャツのデザインを参考に制作）
渡良瀬エコビレッジ × 和綿プロジェクト（写真左・中央）

デスクワークから野外しごとまでいろいろありますが、首元が下げてあるので、第 1 ボタンまで止めても首元が楽です。
第 2 ボタンから止めれば開襟シャツとして野外でも涼しく着られます。僕が昔のデザインを採用するのは、時代を超えた機能美に惹かれるからで、当時はなかった素材作りの技術と組み合わさることで、現代服になります。
襟と袖は艶金さんののこり染（よもぎ染の薬効を期待）にしました。

（都竹）

GAS PROTECTIVE PARKA　和綿ニット 3 番手

初作品　和綿のニット生地がどんな具合なのかを体感するため、比較的伸びのない厚地ニットから取り組むことにしました。丈夫な生地だったので、ラガーシャツも作りたかったのですが、安八町の古着屋 SunnyGarden さんと共同企画で作った 1940 年代のアメリカ海軍が艦船で使用していた作業服 GAS PROTECTIVE PARKA のデザインにしました。戦いのために考えられたデザインを皆が手作業で摘んだ和綿で作ることは、何かしら感じていただけるのではないでしょうか。
刺繍はエンジェルハウス荒井博子さんに自由にお願いしました。和綿の色に草木染めの糸を使っての植物のような優しい模様は、イメージがより広がったと思います。

（都竹）

和綿と和紙～糸を紡ぐ

紙布工房「空桜」主宰　中谷さとみ

職人の手で一枚一枚丹念に漉き上げられた「薄美濃和紙」を経糸に、人々の想いをつむいだ和綿糸を緯糸に、一枚の綿紙布を手織りしました。
その「想い」の全てを一片たりとも捨てる事なく、一針一針手縫いで「たつけ※」と「ベスト」に仕上げ、自然豊かな美濃から頂いた木で、バックルとボタンを作りアクセントに。
（中谷）

※「たつけ」
郡上市白鳥町に伝わる農作業着。直線裁ちで切れ端がでないため布を無駄にしない。

ベスト

「薄美濃」と呼ばれる手漉き和紙から手作業で作り上げた紙糸を経糸に、岐阜県産和綿の手紡ぎ糸と紡績の糸をそれぞれ緯糸に用い、機織り機で丁寧に生地をつくりあげました。
手紡ぎ糸と紡績糸の織りの表情の違いを利用し、貴重な生地を無駄にしない直線裁断・直線縫いでベストを手縫いで仕上げました。機織りで残る糸の始末は編み込んで洋服のアクセントに。
ベストは前後 2way で着用できます。ボタンは、ぎふ木遊館からいただいた岐阜県産木片を削って作りました。

■デザイン・制作：中谷さとみ
■協力：美濃縞伝承会（手紡ぎ糸）
■素材：紙糸（美濃和紙）、木材（岐阜県産）、
　　手紡ぎ糸・紡績糸（岐阜県産和綿）

たつけ

「薄美濃」と呼ばれる手漉き和紙から手作業で作り上げた紙糸を経糸に、岐阜県産和綿の紡績糸を緯糸に用い、機織り機で丁寧に生地をつくりあげました。その後、貴重な生地を無駄にしない直線裁断・直線縫いで『たつけ』を手縫いで仕上げました。機織りで残る糸の始末の編み込みを裾にもってくることで、足元のアクセントとなりシルエットを綺麗にみせてくれます。
たつけのバックルは ベストとお揃いの岐阜県産木片です。

■デザイン・制作：中谷さとみ
■素材：紙糸（美濃和紙）、木材（岐阜県産）、
　　紡績糸（岐阜県産和綿）

●デザイン制作

中谷さとみ なかたに さとみ（美濃市在住）

紙布工房「空桜」主宰

1961 年 奈良県生まれ
公立高等学校勤務を早期退職し、念願の「染織」を学ぶ。
奈良県大和郡山市の藍染め工房「箱本館紺屋」で、藍染めのインストラクターをする傍ら、独学で紙布を織る。
和紙の産地を巡り、薄く強い手漉き和紙を探す中で、美濃の「薄美濃」に出会いその魅力に心酔し、2020 年 4 月に美濃市に移住。諸紙布 (経糸、緯糸共に和紙糸) を中心に作品制作し、工程の「手仕事」にとことんこだわり続ける。

和綿と自然色～いぶきの手仕事

スヌード等

『丸編み機で編まれた筒状のままの生地の形状を活かして、使う人が自由に考えていろんな使い方ができる生地があったら良いのでは?』という声から生まれたものです。
染色は、第二いぶきの利用者さんにお願いしました。いつも扱うものより大きくて厚みがあり、切れ端がくるくると丸かる生地に悪戦苦闘しながらも、カリヤス (黄)、オウキンケイギク (オレンジ)、コーヒー豆 (茶)、玉ねぎの皮 (山吹) で丁寧に染めていただきました。さぁ使い方はあなた次第。あなたならどう使いますか?

■染色：(社福) いぶき福祉会第二いぶき
■素材：渡良瀬エコビレッジ・岐阜和綿コラボ生地（ガーゼ天竺）

紙布工房「空桜」主宰　中谷さとみ

新内外綿（株）／（株）ナガイテキスタイル

岐阜県産 和綿100%
糸にし、布にするという初めてのチャレンジ

岐阜市内で和綿を栽培し始めて5年、自分たちの育てた和綿を、昔ながらのすべて手作業での綿繰り、糸紡ぎでの糸作りと手織りによる『一枚の布作り』だけではなく、将来、デザインと福祉の融合としての福祉施設等での『売れるものづくり』につなげるために、多数の製品ができる紡績、さらに織布を目指そうという想いにより、まず、和綿の紡績＝糸にできる工場を探し始めました。

和綿は洋綿とは異なり繊維質が短いため、現在、通常の紡績工場で糸にするのは難しいと言われています。そんな中、プロジェクトメンバーのマインド松井様から海津市南濃町に工場を置く、新内外綿（株）・ナイガイテキスタイル様をご紹介いただきました。

2019年、新内外綿（株）様に私たちが育てた和綿を見せ、『和綿100%の糸を作りたい』とお願いしたところ、チャレンジをしていただけることになりました。

和綿で紡績糸をつくるのは難しく、作る糸の太さによっては機械任せにはではできず、工場長が手差しで糸を入れ様子を見ながら3番手、5番手、7番手、10番手という4種類の糸を作っていただくことができました。
ここに、岐阜県産100%の和綿の糸がはじめて誕生したのです！

次に、プロジェクトのメンバーでもあるエスト様からご紹介いただいた、各務原市の丹羽治産業（株）様の尽力で、県内の昔ながらの織布工場で、これらの糸をニット生地（丸編み・天竺）にしていただきました。
紡績糸ができたことにより、岐阜県産100%の和綿の生地（織布）も完成しました！

こうして今後の可能性が開けた喜びを感じつつ、早速、全国で活躍するデザイナーやアーティストの方々に依頼し、和綿の生地の特性を活かした新たなプロダクト制作に結びつけることができました。

【協力】●新内外綿(株)　生産工場（株）ナイガイテキスタイル（新内外綿(株)子会社）（海津市南濃町）　●丹羽治産業(株)（各務原市）

tomoni GIFU PROJECT

tomoni つながる 和綿プロジェクト

ニッティングの技術を活かした
ここにしかない布づくりを目指して

和綿のニット生地の完成
大橋ニット（株）

岐阜県には、原糸、撚糸、織物、ニット、染色、縫製など多種多様な業種が存在し、熟練の職人達による丁寧なものづくりが今も引き継がれています。先に和綿100%の糸づくりにチャレンジをしていただいた新内外綿(株)から、大橋ニット(株)の大橋竜二社長を、2020年に開催した第6回tomoniつながる和綿プロジェクト展の会場でご紹介いただいたのが、今回のプロジェクト参画のきっかけとなりました。

大橋ニット(株)は、丸編み無地のニット生地づくりを得意とする岐阜県羽島市の企業で、古くから日本最大の毛織物産地として知られるこの地域全体をより盛り上げたいとの願いで、新商品の開発と、SDGsの視点での適切な量産化に取り組まれてきました。そのなかで、tomoniつながる和綿プロジェクトの活動趣旨にも賛同いただき、手始めとして2021年、ロムアルダス・カミンスカス氏（在リトアニア）から提供をいただいた貴重なリトアニアリネンの糸を、オリジナルのニット生地（丸編・天竺）にしていただきました。

その後、栃木県の渡良瀬エコビレッジの和綿と岐阜和綿とのコラボレーションで新内外綿(株)に紡糸していただいた糸を、大橋社長自らの手で機械にかけ、3種類のニット生地（天竺、ガーゼ天竺、鹿の子／丸編み）が完成しました。こうしてまた岐阜県内の企業の協力により、和綿のものづくりが一歩前進しました。布にするのが困難だと言われている和綿が、高クオリティの生地に仕上がり、一定の量産も可能となって、新たなプロダクト制作への可能性に結びついていったのです。

食品や植物加工の「のこり」を原料とした
「のこり染プレミアム」染色生地の完成
（株）艶金

安心、安全に徹底的にこだわってきた和綿の生地が一定量完成し、次なる課題はその染色をどうするかにありました。今までは生地や糸を、(社福)いぶき福祉会・第二いぶきの利用者の皆さんに一枚一枚、手作業で植物・自然染色を施していただいておりましたが、その部分も大切にする一方で、手作業では追いつかない、一定量の布地について染色整理加工をしていただける県内企業を探していたところ、大橋ニット(株)の大橋社長より(株)艶金の墨 勇志社長をご紹介をいただきました。

(株)艶金は、岐阜県大垣市にある1889年(明治22年)創業の染色整理加工を生業とする老舗の企業であり、墨社長は「染色整理の技術を通じてメイドインジャパンのすばらしさを提案していく」「製造するものの責任において、環境に配慮した染色技術をめざす」「染めは、文化。色を楽しみ、穏やかで豊かな心地を感じるために、変色しない精密部品は不要、変色した色も美しいと感じられ、染め直して長く使いたい人もいる」などのお考えをお持ちでした。

まさに心と身体に寄り添う、安心、安全でサステナブルなモノづくり、地域づくりを目指すtomoniつながる和綿プロジェクトの主旨や願いともピッタリで、プロジェクトへの参画もしていただけることになりました。今回は岐阜県産の「よもぎ」による、化学染料を一切使用しない「のこり染プレミアム」での和綿染色に初挑戦していただきました。
今後も、こうした素晴らしい県内企業や多様な人々とのコラボレーションにより、有機和綿の特色を活かした、世界に通用する高付加価値の製品づくりにつないでいきたいと考えています。

tomoni GIFU PROJECT

tomoni つながる和綿プロジェクト

和綿を活かした新たなものづくりへの挑戦

～渡良瀬エコビレッジとのコラボレーション～

2020年のコロナ禍の中、オンラインでの情報交流を始めた県外和綿関係団体の1つ、栃木県にあるNPO法人渡良瀬エコビレッジと、和綿のものづくりへのコラボレーションとして、渡良瀬エコビレッジで大切に栽培された有機和綿と、岐阜の和綿との混合和綿による糸を用いたプロダクト制作のプロジェクトが始動しました。

まず、その混合和綿の糸の製造を、新内外綿(株)に依頼しました。以前、新内外綿(株)にて和綿100%の糸を作った際には、和綿は短繊維のため、10番手＊の太さのものを作るのが精一杯でした。一般的なTシャツなどの製作には30番手の糸が必要で、今後の製品化を念頭に置き、まずは目の細かい生地を作るためより細い糸づくりへのチャレンジを行うこととしました。また、生産地の異なる和綿を組み合わせることでどのような結果となるかも試してみたいと考えました。

当初は30番手の糸を作ることを目標としていましたが、新内外綿(株)のアドバイスにより、和綿に長繊維であるインドのオーガニックコットンを足して製作した結果、オーガニックコットン33%、有機和綿67%（栃木和綿33%、岐阜和綿34%)程度の配分として、20番手の糸が完成しました。

当初目指した30番手ほど細くはなりませんでしたが、前回の2倍の細さの糸が完成し、他の地域の和綿を加えても、糸づくりに支障がないことも分かりました。加えて活動を進める中で、岐阜県内で長繊維の良質なオーガニックコットンを育てている方にも巡り会い、今後、100%国産有機綿での糸づくり、布づくりが実現する可能性も見えてきました。

糸は、大橋ニット(株)の大橋社長に、和綿の特性を活かした各種のものづくりができる布に仕上げてほしいとお願いをし、天竺編み、鹿の子編み、ガーゼ天竺編みの3種類のニット生地が完成しました。生地はその後、大垣市に工場を置く(株)艶金に染色整理加工をお願いし、仕上げていただきました。その内、天竺編みについては、岐阜県産のよもぎを使い、食品や植物を加工したあとに出る残渣や枝葉を原料にした染色方法『のこり染プレミアム』での染色をしていただきました。

仕上がった生地は、早速、素材にこだわり、デザインから縫製まで手がけるデザイナー・服飾作家のMELCHI DESIGNS 都竹政貴さんに「人の心と身体に寄り添う有機和綿とニット生地の特性を活かしたシンプルな衣服づくりを、創造力をフル稼働してつくりあげてほしい」と依頼しました。都竹さんは、我々の主旨にも深く共感してくださり、彼の素晴らしい縫製技術とフィロソフィーが体現され、すぐにでも販売できそうな素敵な製品たちが誕生しました。

こうして今回、渡良瀬エコビレッジとのコラボにより、一定量の和綿を確保でき、各種の新たなプロダクトを作り上げることができました。このように岐阜のプロジェクトだけでは乗り越えられない課題も、全国の同じ想いで和綿を栽培されている同士で協力し合えば、様々な案件を乗り越えられることでしょう。

和綿は、一定数の製品化を目指しても、まだまだ原料となる有機和綿の必要量不足や、紡績ができる業者が日本に数社しかないこと、これ以外にも生地づくり、デザイン、販路など、幾つもの課題は残ります。ですが、岐阜県は昔から繊維産業が盛んで、関連企業が多々あり、ポテンシャルの高い地域です。

こうした伝統に裏付けされた、高い技術力や開発力をもつ県内企業や人々を我々がプロデュースし、つなぎ、そして何より、世界が日本に求める「本物」で、サステナブルかつ丁寧なものづくりへの確固たる姿勢があれば、課題解決とともに新たな展開へのチャレンジも充分可能であると考えています。

＊番手とは紡績糸の太さを表す単位。数が多くなる程、糸は細くなる。

【協力】● NPO法人渡良瀬エコビレッジ(栃木県) ● 新内外綿(株)　生産工場：(株)ナイガイテキスタイル（海津市南濃町）
● 大橋ニット(株)(羽島市) ● (株)艶金（大垣市） ● MELCHI DESIGNS都竹政貴（岐阜市）

tomoni GIFU PROJECT

かけがえのないつながり

学校法人 平野学園
キートスガーデン幼稚園
清凌高等学校
ヴィジョンネクスト情報デザイン専門学校
理事長 学校長　平野宏司

コットン、シルク、ウール、リネン、、、。天然素材はそれぞれの良さで私たちの生活を豊かにしてくれます。なかでもコットン（ 綿 ）の魅力はやはりフワフワの柔らかさ、肌触りのやさしさ、そして雲のような白さ。見ても触っても、なんだか穏やかな気持ちにしてくれます。

綿の英語「コットン」の語源は、アラビア語の「qutun」や「kuton」で、品質の良い繊維の意味らしいですが、「品質の良い」という言葉にうなずいてしまいます。気どっているわけでもないのに、どこか上品。しかも和綿という、日本で古来生産されているものだと、この国のスピリットのようなものも宿っていそうで、親しみやすさと同時に「大事にしなくちゃ」との気持ちが高まります。

和綿とのご縁を頂いて早５年。私の職場は幼稚園、保育園から高校、専門学校の運営で、和綿プロジェクトに関わる子たちも、その思いも様々です。例えば小さい子どもは、綿毛の感触を楽しむこと、高校生以上は和綿の特性を活かしてデザインをすることに夢中です。ある園児はまだ枝のついている綿をクリスマスリースのオーナメントに使い、またある高校生は、不安な時にギュッと握りしめて安心するためのお守りを作ります。誰もが自分と和綿との特別な関わりを楽しんでいます。

また、和綿起点で様々な方と懇親する機会を頂けるのも、このプロジェクトの魅力です。和綿の良さに触れるとともに、和綿を通じての人との関わりを深める意義はとても大きいものです。

和綿が繰り広げるかけがえのないつながりは、人と和綿だったり、人と人だったり、、、。真っ白で華奢な繊維が自由に絡まり合っている綿玉のように、すがすがしくも温かい関わり合いを感じます。和綿の魅力をこれからも存分に感じながら、様々なつながりを楽しんでいきたいです。

映像「tomoni プロジェクト 2021 in 上石津」
美濃和紙 × 和綿コラボ作品

これまでに平野学園清凌高校とヴィジョンネクスト情報デザイン専門学校の生徒、学生らが tomoni つながる和綿プロジェクト展で制作したバッグやアクセサリー、マフラー等を身につけ、大垣市上石津にある森の中でイメージビデオを撮影してくれました。和綿の素材と森の自然とが調和した映像となっています。
また、和紙と和綿を用いて、心に語りかけるような企画展会場を彩る作品も制作いただきました。

■制作：(学) 平野学園
(清凌高等学校　ヴィジョンネクスト情報デザイン専門学校)

tomoni つながる 和綿プロジェクト

みなで想いを込めた ミサンガプロジェクト

～香るミサンガをアスリートのみなさんに届けよう～

東京2020オリンピック・パラリンピックを盛り上げたいという願いで、4年間かけて種を蒔き、無農薬で丁寧に育てた岐阜県産の和綿の糸と、高山市の伝統工芸の1つである洗草焼の職人が一つひとつ手仕事でつくった精油を塗布できる特殊な釉薬を使ったアロマピースを使い『香るミサンガ』を作りました。

ミサンガに使った糸の染色は、草木染めの製品づくりが好評な福祉施設に依頼し、施設利用者の皆さんに自然の草花での染色をお願いしました。アロマピースにつける精油には、伊勢神宮式年遷宮のご用材が育つ加子母の森で育まれた東濃ひのきの枝葉から抽出した香り高い100%天然由来の精油を用意しました。

ミサンガづくりには、障がいのある方をはじめ老若男女250人以上の方々にご協力をいただき、1本1本手作りで編み上げていただきました。新型コロナウイルス感染症の影響のためワークショップを開催することができない期間は、ご自宅でのリモートでミサンガづくりなどもお願いしました。そのこともあり、ご家族で参加された方々も多く見られました。

こうして全て岐阜県産の『香るミサンガ』は、東京2020オリンピック・パラリンピックに出場する岐阜県ゆかりの選手や関係者のみなさんにプレゼントさせていただくことができました。

『香るミサンガ』を通じて、私たちみなの想いがアスリートの皆さんに届けることができたことをとても嬉しく思っています。

6月17日
ホッケー女子日本代表さくらジャパンの皆さんに、香るミサンガを贈呈しました

ボクシング 田中亮明選手

バドミントン
福島由紀選手、廣田彩花選手

【協力】● 新内外綿(株)生産工場 ;(株)ナイガイテキスタイル(海津市南濃町) ● 守屋里美
● (社福)いぶき福祉会第二いぶき(岐阜市) ● (有)洗草柳造窯 (高山市)
● 加子母森林組合 (中津川市加子母) ● ミサンガづくり協力者
● 岐阜県清流の国推進部地域スポーツ課・競技スポーツ課

tomoni GIFU PROJECT

（写真左）リトアニアリネンの糸　（写真中）リトアニアリネンと和綿で作った糸　（写真右）リトアニアリネンから作った生地

tomoni つながる 和綿プロジェクト

リトアニアリネンと 和綿との交流プロジェクト

北欧フィンランドの対岸からポーランドにかけてバルト海沿岸に位置するバルト三国、その最も南にあたるリトアニア。岐阜県出身で、第二次世界大戦時の在リトアニア外交官であった杉原千畝の「命のビザ」の縁により、岐阜県とリトアニアは友好交流協定を結んでいます。

それを背景に、私たち、tomoni つながる和綿プロジェクトでは、岐阜県で育てた有機和綿の糸とリトアニアの伝統産業のひとつとして世界的に知られているリネン（亜麻）の糸を、縦糸・横糸として、まさに「ご縁を紡ぎ合う」という想いも重ねた製品づくりがしたいと考えました。

そこで、リトアニア出身で現在、岐阜県の国際交流員であるジヴィレ ヨマンタイテ（Zivile Jomantaite）さんに依頼をし、オーガニックリネンの糸をリトアニアから輸入できないかと問い合わせたところ、リトアニアでは独立以来、農業政策の変化などにより自国で生産する農家が激減、製糸工場もなくなり、現在では自国原産の糸はほとんど出回ってなく、現在はフランス、ベラルーシ、中国などで育てた糸を輸入して製品化し、それらをリトアニアリネンとして流通させているという驚くべき事実を知りました。

「リトアニアリネン」は、日本のファッション界でもしばしば取り上げられるなど、世界に誇る伝統産業であったはずなのに、そのリネンが自国で生産されていないという現状はジヴィレ国際交流員にも大きな衝撃でしたが、それは同時に、日本の原種として長く栽培され使われてきたはずの和綿が、自国で生産されなくなった日本の現状とも似通っていると、私たちも衝撃を受けました。他ならぬ tomoni 和綿プロジェクトもまた、そのような現状をなんとかしたいという考えで企画されたものだったからです。

そのような中、ジヴィレ国際交流員は、自国にも必ず、リトアニア原産のリネンを昔ながらのオーガニックな方法で栽培し、復活させようと活動している農家があるのではないかとリサーチをはじめました。そして彼女は、ロムアルダス・カミンスカス氏（Romualdas Kaminskas）を見つけ出してくれたのです。

カミンスカス氏はリトアニアのカウナスから2時間半ほどの距離にあるパネムネーリス（Panemunėlis）という小さな町で、昔ながらのスタイルでオーガニックリネンを栽培しながら、リノ・ムーカ（Lino muka）というリネン祭りを毎年、開催し、街の博物館でリネンの啓蒙ワークショップなどを開催している、元リネン工場経営者でした。

このカミンスカス氏の活動の話をシヴィレ国際交流員から聞いた私たちは、遠い地で、私たち tomoni 和綿プロジェクトと類似する志で活動をしている人々の存在に感銘を受け、まさに、和綿がつないだ新たな縁として、ともに何かをつくっていきたいと考えました。

その私たちの想いを伝えるとカミンスカス氏も共鳴していただけ、岐阜県の和綿と、リトアニアのリネンを紡ぐという懐かしくも新たなものづくりへの一歩をともに進めることとしたのです。

2020年1月、突然のコロナ禍が世界を襲います。現地に赴く事ができないなか、せめて糸だけでもつくりたいと、カミンスカス氏にリネンの糸を購入できないかと尋ねたところ、糸ではなく、栽培したリネンを送付していただけることになりました。ですがコロナ禍の影響で3月には欧州の輸送業務もすべてストップしてしまいます。カミンスカス氏たちが丹誠こめて手作りでつくりあげたリネンを無駄にすることはできません。

そこでドイツ在住の輸送業務のプロの高橋明子氏の協力を得て、一旦、カミンスカス氏が発送したリネン類をフランクフルトで留め置き、無事、日本に届くまで高橋氏に預かっていただくことにしました。そうして3ヶ月。6月に無事、日本に届いたリネンを、再び、新内外綿（株）に預け、試行錯誤ののち、今回、はじめて、リトアニアのリネンと岐阜県の和綿とのコラボによる交流の糸が完成したのです。

紡績の様子

リトアニアリネンと岐阜県産和綿でつくられた糸

【協力】ロムアルダス・カミンスカス（在リトアニア）／ ジヴィレ・ヨマンタイテ（岐阜県国際交流員）／ 高橋明子（在ドイツ）

tomoni GIFU PROJECT

後世まで残し、つなげるという同じ目的で出逢えた喜び

ロムアルダス・カミンスカス

1959 年リトアニア生まれ・在住
民俗芸術家（木彫師）、ツアーガイド
社会的活動：2012 ～ 2022
「リノムーカ（秋に行うリネン
栽培について教える
フェスティバル）」を開催

私はロムアルダス・カミンスカスといいます。民俗芸術家（木彫師）として、主に実用的な芸術作品を作っています。木彫師になる前は、リネン栽培の業界で働いていました。

私はこれまで日本のような遠くの国と繋がるなんてことを一度も考えたことがありませんでした。遠く離れている日本からリトアニアのリネンと和綿をつなぐプロジェクトへの招待をいただいた時、とても驚きました。このプロジェクトを通して、リトアニアのリネンや、リトアニアの文化を皆様に紹介できる機会ができたことを喜んでいます。

「リネンや和綿を後世まで残しつなげる」という同じ目的のプロジェクトに携わることは、非常に嬉しいことで、リトアニアのリネンと日本の綿で糸ができ、できあがった洋服を見せていただき、とても嬉しかったです。また、初めて日本語と接し、日本語の「ありがとう」、「こんにちは」、そして、「さようなら」などを学ぶこともできました。こうして日本とつながることができたのは和綿プロジェクトの皆様のおかげです。

私は古田さんがおっしゃった「綿とリネンの糸という、単純に見えることが、離れている日本とリトアニアの人々を近づけ、つないでくれた」という言葉に感動しました。
和綿プロジェクトの皆様と出会わなければ、私はこんな経験をすることはできなかったと思います。

リトアニアがソ連の一国だった間に、土地は国有化されていましたが、リトアニアが独立した後、土地が民営化されることになり、私は自分で（個人として）リネンを栽培できるようになりました。ですが、リトアニアは欧州連合に加盟した後、経済情勢からリネン栽培が重要視されなくなり、リネンがリトアニアの土地からなくなってしまったのです。

第二次世界大戦の前に、リトアニアではリネンの種をまいた土地は 960 平方キロメートルを占め（リトアニアの農地の合計は 4 万 4300 平方キロメートル）、リネン栽培はロシアとポーランドを次いで、ヨーロッパ第 3 位の国でもあり、リネンは、リトアニア人にとって、衣装、食料、そして薬草を与えてくれる大切な存在でした。

リネンの花が咲いていないリトアニアを想像できる人がほとんどいなかったのです。リトアニア人にとっては、それほどリネンが欠かせない存在でした。

一方、リネンの苦しみはリトアニアの民族が乗り越えた苦難に例えられています。十字軍やルーシ人との戦いなど、リトアニアはまるでモンゴルの脅威の前に立つヨーロッパのシールド（盾）のような国でした。その時代のリトアニアは、バルト海から黒海まで広がる広大な国家でした。

民族は 1918 年 2 月 16 日と 1990 年 3 月 11 日の 2 回独立をすることができました。リトアニアには 2 回誕生日があるということです。

“ リトアニアとリネン（亜麻）はとてもよく似ている
彼らは丈夫で、苦難を耐え忍び
亜麻は食卓を飾る布になる
最も大切なお祝いの時に ”

これは、リネンを研究した、リトアニアリネンの新しい品種を作ったグルズデヴェネス・エルヴィーロスによる詩です。

残念ながら、このようにリトアニア人から愛され、謳われている、リトアニアのシンボルであるリネンは、今やリトアニアの景色から消えてしまいました。リトアニアで青い海のような野原を見かけなくなってしまったのです。こうした悲しい現実が、私がリネン栽培を続けるモティベーションになりました。

かつて、リトアニア人はリネンが咲く時に、「空が地に降りた」という言葉をよく使いました。私はそんなリネンに恋したのです。

リトアニアの人々にリネンを忘れないでほしい、そして、リネンが布になるまでに、どれほど大変な作業があるのかを知ってほしいという気持ちで日々、活動しています。

そこで、リネン復興の意を抱き、2012 年に『リノムーカ』という文化的・教育的なリネンの祭りをはじめました。1 年目の祭りは隣にあるツナイチャイ家の民族的な屋敷で、その次の年は、ツナイチャイの屋敷と同じように素晴らしいナグルカイ家の屋敷で開催しました。そしてついに 2015 年には自分の家と畑で、舞台もつくり行うことができました。リノムーカには「白いリネンの一生」という賛歌、旗があります。参加者にはリネンの服を着て参加してもらいます。2022 年にはリノムーカの祭りは 10 周年を迎えます。

現在、すべてのリネン栽培の作業を 100 年前のように、現代のテクノロジーを使わず行っています。まず、春に種をまきます。リトアニアで品種されたリネンは「ダンギャイ」、「サルタイ」、「カスティーチャイ」、「バルツチャイ」と言います。8月下旬～ 9月上旬頃には、近隣の人々に手伝ってもらって収穫作業を行います。

勤勉な女性たちは、リネンの服を身にまとい、歌を歌いながら、亜麻を引き抜き、地面に寝かせます。次に、亜麻を束に結びピラミッド形に立て、最後に馬車に積み重ね、歌っている女性たちと一緒に、日差しがあふれる道を通って帰ります。

その後、「踏みにじる」＝亜麻の木の繊維の部分を壊す作業を行ったのち、その木の部分をきれいに取るために叩きます。叩いてから、残りの木の部分を櫛で整え、最後に、繊維を紡績し、糸の状態にします。それから、糸が様々な柄の布になるのです。

和綿とリトアニアリネンの生地で作った洋服（都竹政貴制作）

お祭りでは、参加者は見るだけでも良いし、作業の楽しさを自分で体験しても良いのです。もちろん、美味しい食べ物や楽しい催しがなければなりません。リノムーカでは様々な楽団の演奏・コンサートや、自分で亜麻を束にしたり、リネンのお土産を作るワークショップなどもあります。

「あなたは何のためにそんなに頑張っているの？」「なぜこのようなことに自分の時間を費やすの？」とよく聞かれます。

それは、リトアニアの品種のリネンを保存したいからです。リネン文化を失いたくないからです。リネンを栽培するのは手間がかかることですが、私にとってリネンは貴重な存在です。なぜかというと、リネンが発芽、生長し、咲くことに癒されるからです。

リネンがリトアニアの土地に戻ってきて、空がリトアニアの地面にまた降りてくることを夢見ています。

物事の価値はお金だけではないのです。人が人生でやっていることはすべてが戻ってきます。時間がかかるかもしれません。途中、姿を変えるかもしれません。だが、絶対に戻ってきます。

今回、この文章を書きながら、発見したことがあります。つまり、人生でやったことが戻ってくるということの最も良い例が、杉原千畝さんが果たしたことなのではないかということです。杉原さんは自分の利益を思い、行動したであろうか？

最後に、次の言葉を言わせてください。
「呼んでみれば誰かが聞いてくれる、探してみれば見つけるしかない。」

これからも、和綿が長年にわたり生き続け、日本の人々を彩りますように。

（翻訳：ドルスカイテ・ギェドレ（岐阜県国際交流員））

第6回 tomoni つながる和綿プロジェクト展

tomoni つながる 和綿プロジェクト

～未来への実り、つながるカタチ～

●プロジェクト名

しあわせのコットンボール　栃木県

渡良瀬エコビレッジ

NPO 法人
渡良瀬エコビレッジ
栃木県栃木市藤岡町大前 1729−1
https://blog.canpan.info/watarase/
facebook.com/watarase.ecovillage

●プロフィール

2007 年設立。本州最大の湿地であるラムサール条約登録湿地『渡良瀬遊水地』のふところにある NPO 法人です。循環型の農業を軸とした衣食住の自給的暮らしを提案しています。身の周りの自然環境に目を向け、適切に利用していくことで持続可能な社会を作ることを目指しています。

●活動概要

現在は和綿栽培プロジェクト『しあわせのコットンボール』を主軸としています。代表の町田武士が、NPO 設立以前の 2001年から和綿栽培を開始しました。日本古来種にこだわり、農薬や化学肥料は一切使用せずに栽培しています。アパレル企業と栽培契約を結び、栽培した和綿を出荷しています。これまで、企業よって和綿100%Tシャツ・ストール、外国産オーガニックコットンと合わせた今治タオルなども作られました。和綿を出荷するだけではなく、服作りに関わる社員の方々が、種まき・草取り・収穫まで年間通じて、研修として畑へ訪れています。
また独自には、クラウドファンディングを通じて、日本古来の布団や座布団を作ったりしています。その他、季節に応じて農業をベースとしたイベントを一般の方に向けても実施しています。

●活動目的	有機栽培	地域振興	仕事の創出	地域連携	製品販売	種の保存	文化の伝承	手法の伝承
◎一番の目的とするもの	◎	○			○	○	○	○

tomoni GIFU PROJECT

第6回 tomoni つながる和綿プロジェクト展

tomoni つながる 和綿プロジェクト

～未来への実り、つながるカタチ～

●プロジェクト名

和綿「伯州綿」復興プロジェクト　鳥取県

伯州綿
HAKUSHUMEN
TOTTORI SAKAIMINATO

一般財団法人
境港市農業公社
鳥取県境港市上道町 3000 番地
http://hakushu-cotton-sakaiminato.jp
facebook.com/hakusyumen

●プロフィール

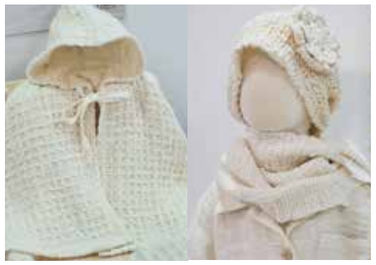
農地の中間管理（貸し借りの仲介）や、耕作放棄地対策に取り組む一般財団法人。
境港市長が理事長を務めており、職員の大部分が、市の農政課の職員が兼務。農業公社と市は、一体となって、伯州綿振興の取組を行っている。
伯州綿栽培については、中間保有する農地の管理手法の一つとして、平成21年度から事業化を行い、取組を開始している。

●活動概要

境港市では、伝統的な地域資源である和綿伯州綿を後世に継承していくことを目的として、伯州綿の復興に取り組んでいる。
(一財) 境港市農業公社は、伯州綿の栽培のほか、伯州綿製品の商品企画・販売、情報発信等のPR活動等を行っている。栽培においては、農薬・化学肥料を使用しない栽培方法を採用しており、地域住民に「伯州綿栽培サポーター」として栽培に参加してもらう仕組みをつくっている。
地域住民の協力を得て収穫した綿で、おくるみとひざかけを作り、おくるみを市内で生まれた赤ちゃんに、ひざかけを100歳になられた高齢者にプレゼントする取組を行っている。
また、市では伯州綿振興に取り組む地域おこし協力隊の受入れを行っており、栽培活動のほか、PR活動、製品開発などに取り組んでいる。
このほか、市内の小学校等で授業に活用したり、民間事業者で伯州綿を使用した製品の開発・販売に取り組む動きが出てきており、それらとの連携も広がりつつある。

●活動目的	有機栽培	地域振興	仕事の創出	地域連携	製品販売	種の保存	文化の伝承	手法の伝承
◎一番の目的とするもの	○	○	○	○	○		◎	

tomoni GIFU PROJECT



第6回 tomoni つながる和綿プロジェクト展

tomoni つながる 和綿プロジェクト

～未来への実り、つながるカタチ～

ハジアイ（支え合い）で育む 和綿の里

熊本県

和綿の里づくり会

熊本県球磨郡あさぎり町須恵 4180 番地 1
つつじヶ丘学園内
http://tutuji-sue.or.jp/publics/index/21/

●プロフィール

当時の須恵村（現あさぎり町須恵）は、岐阜にあるマインド松井の熊本工場（現マインド熊本）を平成元年に企業誘致。そのマインド松井現会長の松井要氏の「どんな方でも安心して使える製品づくりを一からしたい」という思いに賛同したあさぎり町須恵の有志で平成25年に「和綿の里づくり会」を発足。
須恵に伝えられる「ハジアイ（支え合い）」「かちゃあ（共同労働）」を今に繋いで、子どもからお年寄りまで、障がいの有無を越えて交流を行う地域づくりと信頼できるものづくりを行う。

●活動概要

活動に参画している須恵保育園、須恵小学校、須恵小学校 PTA、南稜高校、球磨工業高校、あすなりの丘ふぁーむ、霧の駅、ふるさと振興社、JAくま福祉の里木綿葉、須恵営農生産組合、須恵老人クラブ、マインド松井、マインド熊本、つつじヶ丘学園、その他、地域住民等の個人など、学校、福祉施設、企業など毎回200名前後の参加者が集まり、約15haの畑に5月には種まきイベント、10月には収穫祭を行い、一緒に汗を流す共同作業を通して、地域交流を行っている。また、毎回のように熊本県内はもとより九州、及び、全国からの参加希望もあり交流の輪が広がっている。全体での活動の種まき、収穫祭以外にも定期的に各団体の代表者や各団体が、除草作業や芯止め、1月頃までの収穫などを行っており、収穫された綿は、あすなりの丘ふぁーむやつつじヶ丘学園を利用する障がい者が綿繰り作業を行い、それをマインド熊本、マインド松井が買い付けて糸から製品化までの工程を担っている。

●活動目的	有機栽培	地域振興	仕事の創出	地域連携	製品販売	種の保存	文化の伝承	手法の伝承
◎一番の目的とするもの	○	○	○	◎	○			

tomoni GIFU PROJECT

第6回 tomoni つながる和綿プロジェクト展

tomoni つながる 和綿プロジェクト

～未来への実り、つながるカタチ～

育て、紡ぎ、染め、織る、手仕事工房

熊本県

水俣浮浪雲工房

熊本県水俣市袋 42
http://haguregumo-kobo.com/
http://www.hagure.org
facebook.com/junpei.kanazashi/

●プロフィール

水俣浮浪雲工房は、石牟礼道子さんの助言で 1984年胎児性水俣病患者とともに5人で始めた紙漉きと機織の工房です。現在は夫婦で仕事を続けています。和紙原料はもとより、いろいろな植物を素材として使い、また化学薬品は最低限に自然の力を最大限に利用した紙作りは、日本、世界各地でのその土地の植物を使った紙の開発へと展開しています（クマゾンなど）。機織は、工房当初より栽培している和綿から糸を紡ぎ草木染をして織るという昔ながらの布作りと、和紙から糸を作って織る紙布作りをしています。自然環境と共生しながら暮らしてきた日本人の知恵に学び、何を大事にするかというものづくりの哲学を基本に仕事をしています。

●活動概要

工房開設当初、和綿の種とともに一本の藍染の木綿の反物を見せていただきました。それは昔の人が普通に畑で綿を育て糸を紡ぎ染め織ったものだと教わり、自分の手もそれができるようにその知恵を習得したい、昔の人が当たり前にしてきた布作りを自分も当たり前に続けられたらと思ったのが始まりでした。その時いただいた伯州綿の種を絶やさないように毎年無農薬栽培で育て35年。水俣の風土になじんだ綿を水俣綿と呼び、綿繰り、糸紡ぎ、草木染、機織まで基本ひとりで製品にまで仕上げています。和綿がなぜ希少なのかという綿の話や、綿繰り、糸紡ぎのワークショップ、草木染教室などの伝える活動も行いながら、水俣病を経験した水俣の地で、綿紡織から始まった産業革命＝近代化（効率優先・大量生産システム）を、人と自然の関係性から問い直すような、自然を生かすものづくりを続けていきたいです。（熊本県伝統的工芸品指定）

●活動目的	有機栽培	地域振興	仕事の創出	地域連携	製品販売	種の保存	文化の伝承	手法の伝承
◎一番の目的とするもの	○	○			◎	○	○	○

tomoni GIFU PROJECT

和綿シンポジウム　2022年3月20日　会場／ぎふ清流文化プラザ 長良川ホール

３月20日、ぎふ清流文化プラザ長良川ホールにて、「第７回tomoniつながる和綿プロジェクト展」の関連イベントとして、全国各地から和綿関係者を迎えて『未来へのGIFT(ギフト)・for a sustainable future』をテーマとしたシンポジウムを開催し、過去、６年間の活動のなかで、さまざまな分野でつながってきた人、コト、モノづくりについての成果や課題を見直し、今の私たちだからこそできる持続可能な未来につながる新たなカタチとしての「GIFT/未来への贈りもの」について多方面から話し合いを行いました。

まず、セッション1では、日本や岐阜県の和綿の歴史をひもときながら、なぜ、この産業が廃れてしまったのか、そのなかで何が失われ、何が残ったのかなどについて、私たちが種から育てた和綿を糸にするという大変な仕事を引き受けてくださった（株）ナイガイテキスタイルの杉本社長より語っていただきました。

セッション２では、コロナ禍の中でオンラインミーティングにより、つながりを持たせていただいた和綿づくりの大先輩である、県外で活動を続ける４団体から、和綿の里づくり会 会長 恒松祐輔氏、水俣浮浪雲工房　金刺宏子氏、NPO法人渡良瀬エコビレッジ理事長　町田佳子氏、境港市農業公社 森山謙吾氏の４氏より、それぞれの地域ならではの特徴を活かした和綿づくりに関する考えや報告をいただき、今後の事業を進めて行く上での共通課題、可能性、こだわりのものづくりへの「心」などについて語り合いました。また2年前から交流を続けているリトアニアでリネンの復興活動をすすめている民俗芸術家のロムアルダス・カミンスカス氏からのメッセージも披露されました。

セッション３では、未来に向け、有機農業や大地の大切さを、ゆめくらぶ代表の谷口慶次氏に、そしてSDGsの視点から和綿プロジェクトをいかに社会活動としていくべきかについてサンメッセ総合研究所代表の田中信康氏からご意見をいただきました。

そしてエンディング、和綿プロジェクトのあらたなステージにむけ、持続可能で、誰一人取り残さない社会にむけた「未来へのギフト/贈り物」となるべき決意が語られました。

*当初は展示期間中の2月5日に開催予定でしたが、1月下旬に全国に発出されたコロナ禍による蔓延防止対策への対応として、開催を翌月3月20日に延期しての実施となりました。

オープニングパフォーマンス

舞い
行場 未緒
（舞人）

歌
うのまきこ（木歌（mocca））
（ボイスアーティスト）

当日のプログラム

●オープニングパフォーマンス
演舞　行場 未緒
歌　　うのまきこ

1　繊維産業の歴史
(株)ナイガイテキスタイル　代表取締役 杉本浩二

2　県外和綿関係団体 活動報告等
和綿の里づくり会　会長 恒松 祐輔
水俣浮浪雲工房　金刺 宏子
境港市農業公社　森山 謙吾
渡良瀬エコビレッジ　理事長 町田 佳子

3　未来に向けて
●有機農業、土壌改良の視点から
ゆめくらぶ　代表 谷口 慶次
●社会活動（コミュニティ）、SDGsの視点から
サンメッセ総合研究所　代表 田中 信康
●世界との関わりの視点から
リトアニアとの連携報告、リトアニアからのメッセージ
ロムアルダス・カミンスカス（在リトアニア）
＊録画出演

4　未来へのGIFT
誰一人取り残さない社会のために

■ゲスト

(株)ナイガイテキスタイル
代表取締役
杉本浩二
（岐阜県）

和綿の里づくり会
会長
恒松祐輔
（熊本県）

水俣浮浪雲工房
金刺宏子
（熊本県）

(一財)境港市農業公社
森山謙吾
（鳥取県）

NPO法人渡良瀬エコビレッジ
理事長
町田佳子
（栃木県）

ゆめくらぶ
代表
谷口慶次
（岐阜県）

サンメッセ総合研究所 代表
サンメッセ(株) 取締役専務
執行役員 経営企画室長
サステナビリティ担当
田中信康
（岐阜県）

録画出演
ロムアルダス・
カミンスカス
（在リトアニア）

■コーディネーター

古田菜穂子
（統括ディレクター）

土屋明之
（運営プロデューサー）

■司会

透　千保
（フリーアナウンサー）

和綿の収穫からプロダクトになるまでの工程

栽 培

堆肥撒き・耕運
（1 月～ 5 月）

種撒き
（5 月 八十八夜頃）

草の管理
（6 月～ 10 月）
手や機械（耕運機等）を
使って草の管理をします。

収 穫

（9 月～ 12 月）

写真／大西暢夫

収穫写真 / 大西暢夫

天日干し
（収穫し、その都度）

種取り

綿の中の種を取るため、
綿繰り機を使い、種を
取ります。

綿繰り機

種

綿打ち

綿の繊維を滑らかに、
ふかふかにし、糸が
紡ぎやすいようにします。

ハンドカーダー

綿打弓

制綿機

糸紡ぎ・紡績

糸を紡いでいきます。

スピンドル

糸車　手つむぎ

機械紡績

（ガラ紡機で紡いで染めたもの）

撚り止め
（糸を湯煮し、撚りを固定します）

染　色

染める前に精錬（色が入りや
すいように洗うこと）、色止め
等の下処理を行います。
※染色は、糸の状態、布の
状態のどちらでも染める
ことができます。

草木染め

のこり染め

手織り・編み

糸を織って布にします。

機織り（はた）

手織り

編み（丸編み）

プロダクト

☆ 9 月～ 12 月頃に収穫した種は、紙袋などに入れ冷暗所（冷蔵庫は不可）
で保管し、5 月頃に種を蒔きます。
（年数が経つ毎に発芽率が下がるので、早めに蒔くとよい）

tomoniつながる和綿 プロジェクト・クロニクル

Chronicle

日本の風土と日本人の肌に一番なじむ繊維である「和綿」を通じて、
人と人、人とモノ、モノとコトがつながる物語を紡ぎ、
アート、デザイン、ビジネス、福祉の分野をつなぎ、
新たな出会いと仕事が生まれる場をつくりたい―そんな願いを込めたプロジェクトです。
毎年、春から、プロジェクト推進チームで和綿の栽培を始め、
土作り、種まき、草引き、間引き、収穫、糸紡ぎ、布織り、染色などの
ワークショップを行い、オリジナル製品の開発を目指していきます。

和綿収穫量

平成28年度	16,582g
平成29年度	30,570g
平成30年度	34,875g
令和元年度	105,743g
令和2年度	54,322g
令和3年度	58,000g
合 計	300,092g

和綿の栽培地

ぎふ清流文化プラザ 南側庭園 （写真左）
ともに綿花ファーム（岐阜市下鵜飼1）（写真中央）
福光のともに綿花ファーム（岐阜市福光）（写真右）

2016 平成28年度 活動実績

4 畑での堆肥まき 畑の耕し
5 畑での和綿種まき ワークショップ5/15(日)
畑での「プレス発表＆種まき」5/20(金)
6 畑での草引きワークショップ 6/4(土)
畑での「tomoni つながる和綿 間引き＆草刈き」ワークショップ 6/25(日)
7 染色下処理 7/16(水) 染色実験 7/9(土)
畑での草刈り、間引き 薬剤庭園での追肥
tomoni プロジェクトに参加しよう 和綿を染めるワークショップ 7/18(月・祝)
8 tomoni プロジェクトに参加しよう オーガニックコットン、とんとんスタンプとちくちく刺繍ワークショップ 7/24(日)
オーガニックコットンの綿や糸を使った作品作りワークショップ 8/3(水)
ナンヤローネワークショップ「ふわふわコットン」8/6(土)

2016 平成28年度 活動実績

8 畑での草刈り、収穫
9 第2回 tomoni プロジェクト展 9/18(日)～10/14(水)
第2回 tomoni プロジェクト展 スペシャルイベント 9/24(土)
畑での収穫
10 tomoni つながる和綿プロジェクト 和棉収穫ワークショップ 10/30(日)
11 tomoni つながる和綿プロジェクト 種とりワークショップ 11/26(土)
12 糸つむぎワークショップ 12/4(日)
2017
1 収穫・和綿の片付け
2 ワークショップ ギャザリング2「岐阜育てた和綿の糸つむぎ体験とミサンガ作り」2/25(土)
3 「綿繰り・糸つむぎ体験ワークショップ」3/11(土)
畑での堆肥まき

2017 平成29年度 活動実績

4 第2回 tomoni つながる和綿プロジェクト 推進チーム会議 4/17(月)
畑の看板設置作業、種まき事前作業
畑での種まきワークショップ 4/29(土・祝)
5 tomoni つながる和綿プロジェクト「プラザ庭園での種まきワークショップ」5/8(月)
トークセッション「辻先生から学ぶ 今後の tomoni つながる和綿プロジェクトの展望」5/15(月)
庭園の種まき 畑の種まき、草取り
6 畑の管理機作業、草取り 6/6(火)
「間引き＆草取り」ワークショップ 6/17(土)
7 畑での草刈り後の草どけ作業、苗の植替え作業
8 tomoni プロジェクトに参加しよう 織り体験コースター作りワークショップ 8/15(火) 8/18(金) 8/20(日)

2017 平成29年度 活動実績

8 染色糸の受け取り 8/21(月)
9 畑での草刈り 畑の現状確認、初収穫
10 推進チームメンバーからの報告 9/20(水)
ラジオ収録 10/20(金)
畑での収穫ワークショップ 10/22(土)
11 「tomoni プロジェクト世界のまなざし Diversity Gathering ～ともに、つくる、つたえる、かなえる～」11/3(金・祝)
綿繰り機体験ワークショップ
12 庭園の和綿の片付け
推進チームメンバーからの綿の寄付
職場体験
2018
1 推進チームメンバーからの綿の寄付
「ナンヤローネワークショップ tomoni 描くコットンアート コットンアートってナンヤローネ」1/21(日)
2 綿繰りワークショップ 2/10(土)
第3回 tomoni つながる和綿プロジェクト 推進チーム会議 2/20(火)
ワークショップギャザリング3 2/24(土)「和綿の綿繰り体験と指で編むミサンガ作り」
3 和綿の茎の片付け・耕運作業

2018 平成30年度 活動実績

4
畑の草刈り及び
耕運作業

畑での種まき
ワークショップ
5/20（日）

5

庭園での
種まきワークショップ
5/21（月）

庭園の生育状況確認

6

畑の現状確認、
追加の種まき

第4回 tomoni つながる和綿プロジェクト
推進チーム会議 6/4（月）

7
畑・庭園での草取り作業

岐阜県障がい者
芸術文化支援センター開所式

オープンアトリエ 7/6（金）

8
ミサンガ作り
ワークショップ開催 8/26（日）

畑の生育状況確認、収穫

9
糸紡ぎ講座 9/5（水）

10
和綿の収穫ワークショップ 10/20（土）

2018 平成30年度 活動実績

11
第4回 tomoni プロジェクト展
11/18（日）～12/24（月・祝）

12
ワークショップ「糸紡ぎ体験」12/16（日）

2019

1
綿の収穫、
片付け、
葉抜き作業

2
ワークショップギャザリング4
ミサンガづくりワークショップ
2/24（日）

3
3月 tomoni アートフェスティバル
「tomoni つながる和綿プロジェクト」紹介展示

2019 令和元年度 活動実績

4
畑（ともに綿花ファーム）の
堆肥入れ作業・耕運作業 4/16

畑の草刈作業
及び耕運作業

5
畑の種まき・種まきワークショップ開催 5/12（日）

畑の生育確認

推進チーム会議
5/31（金）

6

畑の除草と間引き作業

7

ミサンガづくり
ワークショップ開催
7/21（日）

8
畑の育成確認（結実）

2019 令和元年度 活動実績

9
畑の綿の収穫

10
収穫ワークショップ
開催 10/20（日）

tomoni アートフェスティバル
「いろんなみんなの展覧会 たわわに、実る。」
紹介展示 10/24（木）～10/27（日）

11
第5回tomoni つながる
和綿プロジェクト展
11/17（日）～12/8（日）

12
糸紡ぎ・ミサンガづくり
体験ワークショップ 12/1（日）

和綿プロダクトの
試験展示
「ともにみあげる
ツリー」
12/6（金）～25（水）

2020

1
畑の綿の収穫・検査き

2
協力「アーティスト・イン・ミュージアム
AIM2020 三綿祐子」2/4（火）～3/22（日）

3
東京 2020 オリンピック・パラリンピック応援グッズ
「香るミサンガ」制作

2020 令和2年度 活動実績

4
綿繰り作業

5
畑（ともに綿花ファーム）の耕運 5/2（土）
堆肥入れ・畝づくり・種まき 5/21（木）

小さな綿花ファーム　種まき 5/15（金）
（ぎふ清流文化プラザ1F庭園）

6
不織布サンプル完成
6/18（木）

リトアニアリネンと和綿との交流プロジェクト
リトアニアリネンの受領　6/30（火）

7
畑（ともに綿花ファーム）

推進チーム会議の開催　7/15（水）

8
東京 2020 オリンピック・パラリンピック応援グッズ
「香るミサンガ」

ワークショップ（リモート）
みんなでミサンガをつくろう［速報］

ミサンガづくり1　おといろアイランド　8/26（水）

ミサンガづくり2　ふれ愛の家　8/28（金）

和綿100%の
生地が初めて完成

9
畑（ともに綿花ファーム）
除草、収穫、看板の設置

2020 令和2年度 活動実績

10
小さな綿花ファーム
（ぎふ清流文化プラザ1F庭園）綿の収穫

リトアニアリネンと和綿との交流プロジェクト
新内外綿にて
リトアニアリネンと和綿の糸の完成
10/27（火）

「いろんなみんなの展覧会 種を、まく。」
プロジェクト紹介
10/8（木）～11（日）

県外和綿関係団体との交流
和綿オンラインミーティング
10/26（月）、10/30（金）、10/31（土）

和綿の里づくり会

清良園エコビレッジ

水俣浮流雲工房

瑞浪市農業公社

11
収穫ワークショップ・美野畑
10/31（土）

収穫ワークショップ・福光畑
11/7（土）

リトアニアリネンと和綿との交流プロジェクト
和綿オンラインミーティング　11/26（木）

カミンスカス氏

12
和綿100%の洋服が初めて完成

第6回 tomoni つながる和綿プロジェクト展
～未来への実り、つながるカタチ～
12/5（土）～1/11（月・祝）

2021

1
綿繰り作業

2
畑じまい

3
枝の始末

2021 令和3年度 活動実績

4
畑（ともに綿花ファーム 福光・美野）
畝づくり

5
畑（ともに綿花ファーム 福光・美野）
小さな綿花ファーム（ぎふ清流文化プラザ1F庭園）
種まき　5/1（土）、2（日）、11（火）

リトアニアリネンと和綿との交流プロジェクト
和綿オンラインミーティング
カミンスカス氏　5/25（火）

6
ホッケー女子さくらジャパン
香るミサンガ贈呈
6/17（水）

県外和綿関係団体との交流
和綿オンラインミーティング
和綿の里づくり会　6/18（金）

和綿オンラインミーティング　6/25（金）
清良園エコビレッジ

水俣浮流雲工房

瑞浪市農業公社

7
推進チーム会議　7/1（木）

ぎふ木遊館「夜の木遊館」
ワークショップ
「とんとんかちかちふわふわブレーパーク」
7/17（土）

2021 令和3年度 活動実績

8
美濃市の
紙布工房「空桜」にて
和綿と和紙による
混合糸の織りで
はじめての混合紙布が完成

9
畑（ともに綿花ファーム 美野・福光）
草刈り、収穫

10
岐阜市の
メルチデザインにより
新たな和綿の服づくりへの
取組みを開始

畑（ともに綿花ファーム 美野・福光）
収穫ワークショップ　10/24（日）

11
清良園エコビレッジとのコラボ
新内外綿にて、糸完成

「いろんなみんなの展覧会」プロジェクト紹介
11/19（金）～23（火・祝）

ぎふ木遊館「オータムフェスタ」
ワークショップ「木で編む和綿のコースター」
11/20（土）

清良園エコビレッジとのコラボ
大綿ニットにて、生地完成

12
染色にて
「のこり染め」
生地完成

清良園エコビレッジとの
コラボ生地を
いふき福祉会にて
自然染色

2022

1
第7回 tomoni つながる
和綿プロジェクト展
1/15（土）～
2/23（水・祝）

2
和綿シンポジウム
2/5（土）

3
ワークショップ
「和綿の織り体験」
2/13（日）

tomoni つながる 和綿プロジェクト

tomoni GIFU PROJECT

人と人、人とモノ、モノとコトがつながる物語

「ともに、つくる、つたえる、かなえる」をコンセプトとして、
文化芸術の分野において障がいのあるなしに関わらず、
ともに新たな創造活動を行っているtomoniプロジェクト。
tomoniつながる和綿プロジェクトでは、制作された各種プロダクトを通じ、
障がいのある方や施設などでの新たな才能や仕事の発掘も目指しています。
彼らの素晴らしい感性や手仕事に、ご興味、ご関心のある方は以下までお問い合わせください。
私たちは、これからも障がいのある、なしに関わらず、それぞれの可能性を活かした、
こだわりのものづくりを進めていきます。

tomoniつながる和綿プロジェクトメンバー

池田町社会福祉協議会 ふれ愛の家
（社福）いぶき福祉会第二いぶき
（株）エスト
大橋ニット（株）
加子母森林組合
岐阜県環境生活部文化創造課
岐阜県教育委員会特別支援教育課
岐阜県健康福祉部障害福祉課
岐阜県立国際園芸アカデミー
岐阜県商工労働部観光国際局国際交流課
（社福）岐阜県社会福祉協議会
（一財）岐阜県身体障害者福祉協会
岐阜県美術館
（公社）岐阜市シルバー人材センターぎふ作農隊
岐阜県福祉事業団 清流園
ぎふ木遊館
岐北JFC
光陽福祉会後援会
（一財）境港市農業公社（鳥取県）
新内外綿(株)
Team Apop
（株）ナガイテキスタイル
（株）艶金
(一社)日本ユニバーサルデザインライフ協会
丹羽治産業（株）
学校法人 平野学園
（株）マインド松井
（株）水俣浮浪雲工房（熊本県）
ミドリノタネ
美濃縞伝承会
MOMOじかんくらぶ
ゆめくらぶ
（一社）若者サポートnanairo
NPO法人渡良瀬エコビレッジ（栃木県）
和綿の里づくり会（熊本県）
青山英孝
荒井博子
池村真一郎
市川尚樹
市村美佳子
宇津木哲子
大西暢夫
大野美里
小寺克彦
小酒井多会子
清水久義
田口康代
田中鉄男
田中信康
田辺謙太朗
都竹政貴
所純子
戸田柳平
中谷さとみ
成澤裕子
松波広聖
柳原史佳
山川淳生
山田真理
吉川章
RYUREX
ジヴィレ・ヨマンタイテ（元岐阜県国際交流員）
ドルスカイテ ギェドレ（岐阜県国際交流員）
ロムアルダス・カミンスカス(在リトアニア)
tomoniつながる和綿プロジェクト推進チーム

等

（敬省略・50音順）

■統括ディレクター
古田菜穂子

■運営プロデューサー
土屋明之

■運営プロデューサー
小島紀夫

デザイン・写真　小寺克彦（Kデザイン）

記事、写真の無断転載、無断使用はご遠慮ください。

2022年3月発行
制作／発行　tomoniつながる和綿プロジェクト推進チーム事務局（（公財）岐阜県教育文化財団内）
〒502-0841　岐阜市学園町3-42 ぎふ清流文化プラザ 1階
TEL：058-233-5810 FAX：058-233-5811 gecf@g-kyoubun.or.jp
https://www.g-kyoubun.or.jp　つながる 和綿 岐阜 検索

これまでの活動など詳しい情報は、ホームページをご覧ください。